
あおむしクロンと柚子実ちゃん

菜種油

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あおむしクロンと柚子実ちゃん

【Nコード】

N3217I

【作者名】

菜種油

【あらすじ】

みかんの葉っぱの先っちょで揺れる、ぷちんと黄色くちいちやな卵。
やがて生まれたちびっこくろむしは、ひとりの女の子と出会いました。

画像をお借りしております。

www.misaki.rdy.jp/illustrst/index.
htm

(前書き)

みかんの葉っぱの先っちょで揺れる、
ぷちんと黄色くちいちな卵。
やがて生まれたちびっこくるむしは、
ひとりの女の子と出会いまし
た。

> i 2 2 1 3 | 3 6 1 <

あおむしクロンと柚子実ちゃん

さわ さわ さわ さわ

もうすぐ もうすぐ まぶしいせかいが まっているよ

黄色いベッドの中でねむるボクに、遠くで聞いたそよ風の声は
もうすぐボクも、広い世界に出られるよ教えてくれた。

広い世界ってどんなところ？

黄色いベッドがゆらゆらと風にゆれる。

雨上がりの空の下。夏の暑い日に、ボクは生まれた。

ボクのお家は黄色いベッドから黄緑色のつるつるカーペットに
変わっていた。ボクのお家はみかんの木。ボクのお家はりっぱ
なお家で、とってもおいしいご飯にもなる。

ボクのお家の木は『中学校』という大きなお家のお庭にあって、
白と黒のもよりの皮を着た男の子や女の子が、毎日ボクのお家の
前の道を何度も通り過ぎて行く。みんな元気でいつも楽しそうだ。

ボクは昨日お外に出たばかりだけど、みんなの声はずっと前から
黄色いベッドの中から聞いていたから、お外は一体どんなところ
なのか、ずっとずっと楽しみだった。

「あゝ！ 生まれとうやーん！！」

とつぜんボクのお家がグラリとゆれた。わわ。なんだ？？

ボクの目の前いっぱいに見えたのは、とつてもとつてもおっきな顔。ふわふわとしたくせのあるかみの毛に、くりつとした目をパチパチさせて、指先でボクがつかまっているお家のくきをつまむと、そのおっきな顔の人間の女の子は、ボクをじいっとのぞきこんだ。

こ、こんにちは・・・？

ボクがビクビクしながら少しおしりをふってあいさつをすると、その女の子はほっぺを赤くして、大きくぽかんと口を開けた。

「ふわあ、動いた・・・糸くずっちゃ。ちいさか〜」

クロンが生まれてくるの、柚子実、ずっと待つつたんよ〜。

女の子はそう言つと、指の先つちよでボクの頭をちよんとさわった。

くろん？

くろんってなに？

そう思つて女の子の顔を見上げたら、女の子はとつぜんボクのお家のくきをにぎつて少しねじると、ぶちつと木からちぎってしまった。

・・・え？ あれ？ あれ！？

お家がちゆううから、なくなっちゃった！？

あわあわしているボクをながめて、女の子はニツと笑い、ボクのお家の木から、他の枝もぶちぶちとちぎってふくろに入れると、女の子が着ている白い皮にボクのお家のくきをさして、口笛を吹いて歩き始めた。

とっても楽しそうに歩き続ける女の子の口笛を聞きながら、ボクはころげ落ちないように、必死にお家につかまっていた。

女の子が歩きたびにぐらんぐらんにゆれるお家の上で、ボクはすっかりよっぱらってしまって、目を回してじっとしていると、女の子はボクが動かないのに気が付いて、ポケットからボクのおうちのくきを取り出すと、ボクの顔をのぞきこんだ。

「もう少しで袖子実んがたば着くけんね」

女の子はしばらくすると、とうめいな入れ物の中にボクのお家を下ろしてくれた。少しだけ空気がぬるいそこには、ボクのお家と同じみかんの木の葉っぱが、若い枝ごと置かれていた。

「ここがクロンのお家たい」

・・・どう？

ボクのおうちが動かなくなっしてしばらくしてから、ボクはそつと頭を持ち上げて、まわりのものを見わたしてみた。とうめいな箱の外には、見たことのない色々なものが見える。なんだかボクにはよくわからないものが、いろんな場所に、とにかくたくさんあるのが見えた。

ふん？

なんかよくわかんないけど、面白い所に来たなあ、ボク。

頭のぐらんぐらんが治まってしばらくすると、ボクはものすごくおながへつていることに気がついた。とりあえず、自分が乗っているお家をむしゃむしゃ食べ始めると、女の子がまたじいーっと、ボクの食べている様子を見ている事に気が付いた。

・・・？

口いっぱい、やわらかい葉っぱを入れてもぐもぐしていると、女の子がごくんとのを鳴らしてつぶやいた。

「クロン、柚子実もご飯ば食べち来るけん！ ごっはん、ごはんっ！」

・ ・ ・ ボクが、クロンで、あの女の子が柚子実ちゃん？

本当はボクにはちがう名前があるのだけど、柚子実ちゃんは勝手にボクをクロンと呼ぶことに決めたらしい。

柚子実ちゃんは、ボクにごはんの葉っぱをくれる時には『中学校』であったことをいろいろ話してくれたけど、ふだんはボクのようにを外からじーっと見る以外はほとんど自分の好きなことをして、部屋の真ん中に置いてある大きな四角いものに、細い枝をこすりつけていることが多かった。

「市のでんらん会に出すけん、クロンの絵ば描きよつとよー」

柚子実ちゃんがぺたぺたちよんちよんと細い枝を動かしながら

ボクに言った。

柚子実ちゃんが持っている細い枝は面白かった。枝の先っぽに、細かいふさふさがついていて柚子実ちゃんが枝をびゅーっとひっぱると、そこからいろんな色が四角いものにくっついてゆく。

ボクは“てらん会”も“絵を描く”も、なんだかよくわからなかったけど、柚子実ちゃんがじいっとボクをいっしょうけんめい見ているのがなんだか楽しくて、ボクもじいっと柚子実ちゃんのことを観察することにしたんだ。

このとうめいな“クロンのおうち”にやって来てから、ボクもどんだん体が大きくなってきて、自分の着ていた皮がきゅうつつになってくると、着ていた皮をぬいで、きゅうつつになるとまたぬいで、をくり返した。

柚子実ちゃんはとっても不思議だ。朝と夜と、毎日着ている皮をぬいで、新しい皮に取りかえているみたいだった。ボクはぬいだ皮はもう着られないのに、柚子実ちゃんは朝になると、また昨日と同じ皮を着て、どこかにいなくなる。

「じゃあね、クロン。学校ば、行ってくるけん」

柚子実ちゃんは本当はもつとすてきな皮を何枚も持っていたけど、それは白と黒のもよりの皮を着ない時にしか使わないみたいだ。今日も柚子実ちゃんは、白と黒の同じ皮を着てボクがいる部屋に帰ってくると、足にかぶせていた白い皮をふたつとも、ポイポイと放り投げた。

なんか、ボクが来たときよりも物がだんだんふえてる気がするよ？

たまに、足にかぶせる白い皮がなくなる時があつて、そうすると
柚子実ちゃんはいろんな皮がしまつてある箱のおくまでのぞいた
後、部屋に落ちてゐる白い皮をかき集めて、バタバタと部屋の外
に走つて行くんだ。

「ねー！！　ばあちゃん、ゆずのキレイかくつ下ば知らんとー？」

あらあゝ、柚子実は一。こげんかためち、柚子実のはせんたくき
にかけんにやもうなかねえ一。和裕のがあつちやないと？

いやじゃー！　なんでオレが、かさんならんとや！？

姉ちゃんいつつもオレのはいていくけん、オレのがねえやつか！
どうせそんくつ下ば、昨日もはいとろつが？

ほんなら後一日、はいとつたらええこた！

遠くで男の子の音がする。男の子は柚子実ちゃんに大きな声で
しばらくの間ワーワー文句を言つていて、少したつとほつぺを
ふくらませた柚子実ちゃんが、ボクのいる部屋に戻つて来た。

「くつ下一足くらいなんか、あん男は。せわしか男たい」

柚子実ちゃんはずつづつ言いながら手に持つて戻つてきた白い
皮を足にかぶせると、ひよつとボクのお家をのぞきこんだ。

「・・・あれ？　クロン??　おらんごとなつた!？」

ボクはついさつき小さくなつた皮を脱いだところで、今までとは
ちがう緑色の皮をボクは着ていた。ボクが葉っぱのかげからのこ
のこ出て行くと、柚子実ちゃんは目を丸くした。

「おおお〜！！ クロン、もう青虫になったとねー・・・」

ちようちよになるんも、じきゃんねー。

柚子実ちゃんはとうめいな箱の上から手を入れて、ボクの背中をそつとなでてくれた。なんだか背中が少しむずむずしたけど、ボクはじつとしたまま柚子実ちゃんの顔をながめていた。

「そうだ！ クロンの変身お祝い、せんにゃいかんばいねー」

柚子実ちゃんはそう言うと、ボクが乗っている葉っぱの枝をひょいと持ち上げた。

ボクはまた全部の足に力を入れてしっかり葉っぱにしがみつくと、柚子実ちゃんはボクのお家の根元のくきを丸い入れ物にさして、またどこかへと歩き始めた。

うわ。ど、どうなっちゃうんだボク？ またお引っこし??

しばらくすると、コトン。と音がして、ボクのお家のゆれがぴたっと止まった。

・・・あれ？

ガタ。

ポン、ポーン

なんだかきいたことのない音がして、ボクがそろそろと回りを見わたすと、柚子実ちゃんがボクを見上げてニッコリ笑った。

「たん生祝いばせんかったし、それもいっしょに歌うけんね」

さっきの不思議な音がまた始まって、ボクのお家の枝も少しだけ
ビリビリふるえてきた。

“たんじょういわい”ってこの音のこと？

この音が何なのか、ボクにはよくわからなかったけど、ボクより
下に頭がある柚子実ちゃんの顔を眺めていると、柚子実ちゃんは
ボクを見上げてとても楽しそうに口を大きく開けて歌い始めた。

“きょーうは クロンの たんじょうびー げんきなあおむしに
なりましたー クロンのひみつ すてきなひみつ おてんとさー
まも なないろぐもも みーんなみんな．．”

「姉ちゃん、歌もよかばってんが、今日も校門のあいさつ係ば
せにやいかんめえ？ もう出らんば、ちこくやなかと？」

気がつくと、部屋の入口に男の子が立っていた。

「え、今何時？ いやー！ ちこくやーんっ！ カズくん、クロン
箱に戻しといてっ」

「はあー？ クロンちゃんかー？」

「そん青虫たいー！ 姉ちゃんの部屋ば、持ってっといてっ」

わああ、いってきますす〜！

あつという間に柚子実ちゃんは姿を消してしまつて、後に残つた男の子がボクのお家が入つた丸い入れ物を持ち上げた。

「あゝ。なんね、また姉ちゃんこげん虫ば取つて来たとか。

おまえがクロンか？」

あの・・・本当はちがう名前があるんですけど・・・。

ふうん。

つぶやいた男の子はボクをじつと見下ろした後、ボクのお家を持ってずんずんと歩き始めた。

わわ。またどっか行くの？

ボクがまた必死に葉っぱにつかまると、ボクの頭の上で男の子の声が出た。

「柚子実姉ちゃんは、部屋ん掃除やらもようせんで、いつでんてれーつとしよるばつてん、絵だけは、ほんなごて上手かやる？」

さっきの曲は『たんじょう日のひみつ』いうんやぞ。

おまえ知つちよつとか？

男の子はボクをもとのとうめいな箱の中に下ろすと、辺りを見わたして、かゝ。相変わらずばりきたなかなあ、とため息をついた。

「オレもそろそろ学校行くけん、またな。クロン」

コンコン。と、とうめいな箱をたたいて、男の子は部屋を出ていった。

それからしばらくの間、ボクはこのとうめいな箱の中で、柚子実ちゃんに毎日おいしい葉っぱをもらいながら、お家の枝を行ったり来たりしてすごした。

柚子実ちゃんはいつも、ボクに向かっておしゃべりしながら絵を描いている。柚子実ちゃんの持つ細い枝が動くたびに、少しずつ少しずつ、ボクの目の前で四角いものはきれいな色に変わっていった、ボクも毎日そんな柚子実ちゃんをながめているのが、とてもとても楽しかった。

そして、何日かたつと大人になるためのじゅんびをする時が来たのがわかって、ボクはもう葉っぱを食べるのをやめて、口から白い糸をはいて、自分の体をくきにしっかりと結びつけた。

たぶんもうすぐ、柚子実ちゃんともお別れなんだ。

ボクがウトウトと眠り始めたころ、柚子実ちゃんがなにか歌っているのが聞こえてきた。

柚子実ちゃん、ボクは上手にちょうちよになれるかなあ・・・？

ボクはしっかりとした温かいさなぎの中、朝が来て夜が来て、また朝が来て。何度も何度もくり返している間、ねむりつつけるボクの体はさなぎの中で、少しずつ変わっていった。

眠りから覚めた時、お外は少しずつ明るくなってきているところだった。

目が覚めたんだから、もうさなぎから出なくちゃ。ボクは体中に力をこめて、さなぎからぬけ出すことにむちゆうになった。

さなぎから出るのとても苦しい。でも出ないといけないんだ。なぜかはわからなかったけど、ボクはそう思いながら、少しずつ体を動かしてなんとかさなぎをからぬけ出した。

ボクの体はずぶぬれで、自分が出てきたさなぎにつかまってしばらくじっとしていると、少しずつ体がかわいてくるのがわかった。

よし。もう大丈夫かな？

ボクのせなかには、今までなかったすてきな羽が出来ていた。今はくしゃくしゃに折りたたまれているこの羽がうまく広がらないとボクは飛ぶことが出来ない。ゆっくり、ゆっくり、集中して羽を動かして広げてゆく。

気が付くと、さっきまでねていた柚子実ちゃんが起きて来て、とうめいな箱におでこをくつつけたまま、ボクのようにすべじいとながめていた。

柚子実ちゃん。ボクのかっこう、おかしくない？

今まではただの青虫だったのに、あまりにも姿を変えてしまったボクに柚子実ちゃんは目を丸くして、羽を広げてゆくボクをじっと見ていた。

ボクもちよっただけ恥ずかしかったけど、きれいに広がった背中の羽をゆっくりと動かして、しわが出来ないようにのばしていった。

とつぜん、柚子実ちゃんの指先がボクの目の前に伸びてきた。

・・・？

くるくるとまかれたボクの口で、柚子実ちゃんの指先をつついてみる。柚子実ちゃんはボクがつかまっているくきをとうめいな入れ物から出してくれた。

「ほら、見て？ クロンの絵よー」

柚子実ちゃんとボクの目の前には、一本の大きなみかんの木が描かれていて、そこには黄色い卵と、黒と白の皮を着た赤ん坊のボクとあおむしになった子どものボクと、さなぎになって眠るボクと、羽をつけて空に舞い上がる大人になった今のボクがいた。

「クロンには、一番に見てもらおうって思うとったんよ。は、間に合ってよかったー」

柚子実ちゃんは絵から離れると、まどをうんと大きく開けた。

「クロンは、柚子実の中学校の、みかんの木で生まれたんよ。あそこならかわいいおよめさんば見つかるかも知れんけん。元気でね」

柚子実ちゃんはそう言って笑うと、ボクの枝をまどの外に差し出した。

さわ さわ さわ さわ

ようこそ ようこそ まぶしい世界が 待っているよ

柚子実ちゃん、さようなら。元気でね。

ボクを呼ぶなつかしい声に、ボクは羽を広げて風に乗せると
柚子実ちゃんが手に持つくきを思い切り足でつけた。

体がふわりと、ちゅうに浮くとボクはあわてて何度も羽を
羽ばたかせた。

ボクはちよつとだけ柚子実ちゃんの回りをヨロヨロと飛んだ後、
こつをつかんでまぶしい空に向かって羽ばたいた。

「ばいばーい!!! クロニー!!!」

柚子実ちゃんの姿がどんどん小さくなっていく。ボクが家の
屋根を飛びこえると、柚子実ちゃんの姿はすっかり見えなく
なってしまった。

さあ、今度は自分でご飯を探さなくっちゃね。

花の香りとみかんの木をさがして、ボクはぐんぐん高い空に
まが上がった。

それから何日かして、ボクは道を歩いている柚子実ちゃんの姿を
見かけた。柚子実ちゃんは相変わらず白と黒の皮を着ていたし、
髪の毛もやっぱりふわふわだった。

そうそう、柚子実ちゃんに話しておかなくっちゃ。

ボクみたいに人間のお家で生まれたり、大きくなったりする
仲間に出会つと、みんなでそのお家のように話を話し合うんだ。

そこではいろんな楽しい話を聞くけれど、青虫にたんじょう日の

お祝いを歌ってくれたのは、柚子実ちゃんだけだったよ。
みんな、柚子実ちゃんのお家を見に行つて、柚子実ちゃんのこと
も、こっそり見ているんだつて。

いつかまた、ボクの仲間が柚子実ちゃんのお家に遊びに行つたら
その時は、どうぞよろしく。

おしまい

(後書き)

お読みくださりどうもありがとうございました (^^)(

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3217i/>

あおむしクロンと柚子実ちゃん

2011年1月26日07時00分発行